# 令和５年度　第１回松本市地域産材活用検討会議　議事録

日　　時：令和５年７月１８日（火）午前１０時～正午
会　　場：松本市役所議員協議会室
出席委員：勝山崇史委員、大塚薫委員、原薫委員、小口真澄委員、伊藤淳委員、浅井正徳委員、宮澤仁平委員、岩垂智昭委員、滝澤顕委員、中川誠委員、星川嘉諒委員、北澤治樹委員
欠席委員：小笠原良一委員

１　開会（森林環境課長）

２　環境エネルギー部長あいさつ

３　座長及び座長代理選出
　座長：星川委員、座長代理：浅井委員

４　座長あいさつ

５　委員及び事務局職員自己紹介

６　会議事項及び発言要旨
⑴　松本市地域産材活用検討会議の目的及びスケジュールについて
　ア　資料１に沿って事務局から説明
　イ　質疑等
　　【原委員】
　　活用するのは主伐した材のみか。
　　【事務局】
　　主伐に限らず、間伐材等も活用していければと考えている。

⑵　松本市の森林資源の現況
　ア　資料２に沿って事務局から説明
　イ　質疑等
　　【星川座長】
　　活用実例があったが、山側から建築側の方も含めてご意見いただければと思う。
　　建築側から滝澤委員いかがか。

【滝澤委員】

建築側というより工務店からの話になるが、カラマツの印象はこの資料でこんなにあるんだなと思った。カラマツは東信のイメージがある。活用していくには、川上から川下までの会社が揃う必要があることは皆さんも分かっていると思うが、どうやってブランド化していくか。まず認知してもらうことが課題ではないか。

松本市の施設に活用するための課題は、カラマツは元々癖のある材料だということは認識していたが、建物に使う前に、県でも間伐材をガードレールなどに使っているように、まず皆さんに認知してもらうために建物ではなくベンチや家具など公共的に何か見える形で市として積極的に使っていく。生産性を求める前に、まずは認知していただけるように商品化をしていくこと。民間であれば、補助金等で助成し多くの方にカラマツを使っていただけるようなとこから始めて徐々に建物にシフトしていく。我々が使っているのは、羽目板が多いが、角材や床材などどうしても構造材だとねじれや割れることが多いので、集成材にするなどそのような形でできれば良いと思う。いずれにしても、安曇野産というのが結構多いので、松本産という認知がまず一番の課題だと思う。

【星川座長】

山側で素材生産を行っている小口委員いかがか。

【小口委員】

私が考えた課題は、森林を集約化しながら素材生産するのだが、材を出しづらい場所が多いという印象がある。運搬のトラックが入れないような場所など、具体的には、稲倉や里山辺、入山辺など、そういうところで道が細く出しづらい。土場にする場所も少ないことからトラックも来ないため、良い材があってもなかなか出してくれないっていうのは非常に課題だと思う。

【星川座長】

集積場という話をいただいたが、これから費用拡大や集積、道の問題など市と協議していかなければと思う。この件は、またいろいろと話していければと思う。

⑶　地域産材活用に向けた課題について

【星川座長】

地域産材活用に向けた課題について皆様からそれぞれお伺いしたいと思う。

それでは、勝山委員からお願いします。

【勝山委員】

地域産材を活用していくための課題を考えると、現状は製品があまり売れていないところだと思う。景気の影響や住宅の着工数もあるが、建材以外の製品の需要の喚起も必要。やはりその価格の格差を市でも補填する、施主さんへの助成制度もあ

るがそういったものをどうしていくのか。地域産材を活用していくためには、製品そのものが売れている市場があって、その中に地域材の需要をどうやって増やしていくかという考え方だと思う。あとは、どうしたら買ってもらえるのか、消費者のニーズをリサーチしなければいけないのか、価格なのか、規格なのか、性能、見た目、もしくはその製品のストーリーなど、そういったものを考えて選択してもらえるメリットなどをどう訴えるか、どういったものが欲しいのかという商品づくりも考えていかなければいけない。

公共施設に地域産材を活用するための課題は、地域内には個人有林から国有林まで含めいろいろあるが、まず自前の松本市有林の材を活用して、試験的に実施しながらその具体的な課題を出していくような流れはどうか。製造はどういう流れになるのか、規格だとか製品の価格はどのくらいになるのか。まず各施設の管理課や設計する各マネジメント課から、どんな部材、どのくらいの価格であれば取り入れやすいか聞いていただき、施設利用者の目に付きやすい場所、アピールしやすい場所をお願いした上で、ある程度製品を絞り込んで、どのタイミングで発注がかかってこれが必要になるのか、もう少し絞ると検証しやすいのではないか。製材・乾燥・加工となると、保管する場所も考えていただきたい。山に立木としてある状態から生産調整するよりは、保管しておいて使う方が良い。

全体を通して、資源量とするとカラマツは確かに多いが、アカマツの量も相当あり松枯れが進んでいる中で、集約化していけばそれ以外のスギやヒノキなども出てくるので、樹種は多様にある地域。カラマツで試験的に実施するが、並行してカラマツ以外の地域の樹種の活用も検討していく必要がある。先日、林業総合センター研究発表会で、赤松の熱処理剤の紹介があった。青が入っているものでも着色されるので、見た目もいいし強度も高くて良い製品ができるという紹介もあったので、そういったことも併せて考えていったらどうか。

【星川座長】

外材製品より価格が高いということがあったが、それについてご意見は？

【伊藤委員】

材が製材所に行って、その先の流れがどうなるのかは専門ではないのでわからないが、丸太原木の価格でいうと、カラマツで言えば一昨年昨年と合板の価格が上がっている状況ではあるが、基本的にどこでどのように伐ってどのくらいコストがかかった丸太だからいくらにするという価格設定ではない。場所によってコストはまちまち。どこの事業体さんもそのあたりの生産コストを抑えながら所有者になるべく還元できるように考えていると思う。機械を使って伐ったのかノコギリを使って手で伐ったのか関係なく、同じ丸太であれば値段は一緒である。

【星川座長】

先程話が出た林業総合センターでのアカマツの熱処理剤は、最近新しく進められていることだと思う。皆さん見たことがないという方もいると思うので、この辺もいろいろと公開していただければと思う。
次に大塚委員お願いします。
【大塚委員】
今までお聞きしたことと重複するが、要は需要と供給の問題。私達が搬出する側として材を伐るが、供給先、需要側があるのかということ。市の公共事業等で、供給を満たせるだけの需要のボリュームがあるのかということ。供給量は多くある。
材の搬出コストが場所により違う。コストに見合う木材流通の相場単価が合うのかどうか。搬出側としては、かかったコストに対して見合うだけの価格が必要。差がある場合どうするのか。補助金等で補填するのか。そういったことが課題。
【星川座長】
搬出コストは、場所により違いが出るし、集積場の問題もある。近隣に施設等があればコスト削減につながると思うが、特に山間部は大きな場所が無く難しい。
次に原委員お願いします。
【原委員】
今回は市有林のカラマツに限定した話かと思うので、それをいろいろな公的資金を使って公共施設で活用することはそんなに難しい話ではないと思う。実際に朝日村で三つの事例があった。最初はログハウスのようなキャンプ場の施設、次は保育園、最後は庁舎をつくられた。あのときに少しご相談を受けたこともあって、せっかくそのような事例、予定があるのであれば、ただ使えばいいということではなく、今後の林業木材業というものが地場産業になりうるような仕組みを作ることを目的にしていかなければということを提言した。しかし、なかなかそのような形には至らなかった。「補助金があったから立ちました」という実績にはなるが、実際に朝日村の村有林の森林が生かせるような流れにはならなかった。
なので、市有林のカラマツを使うというだけではなくて、その後の本来の目的を達成するためには、この地域の林業が抱えている問題全般に取り組まないと、多分利用して終わってしまうということになりかねないという懸念がある。
あと、先程秋山さんから地域の森林について説明があったが、私個人的には林業をはじめて25年ぐらいになるが、その頃からなぜ平準化が必要なのか理解ができなかった。最近になって林野庁は、林業成長産業化のために収穫期を迎えた森林をどんどん切りましょうとおっしゃっていたが、50年から100年の間に確かにいろいろな成長曲線というのはマックスを迎えているが、そこで一旦切ってしまうと木材生産以外の森林が持つ公益的機能が一度ゼロになってしまう。今でこそ森林が活用されないことが日本では問題になっているが、過去には長い歴史の中でずっと禿

山。そのときに何が起きていたかというと、やはり大災害が起きたわけでそのことも考えないといけない。禿山だった時代から今は森林資源が豊富にある時代になり、でも使われなくて荒廃しているというこの両極端な時代を経験してきたこの先に、私達がどういう森林の利活用をしていけばいいのかということを、本当は根本的に考え直さなければいけないと思うので、林野庁はあのようにおっしゃっているが、地域の実情に合った山づくりとそれに合わせた材の利活用ということをしっかり見据えていかないと本末転倒になってしまうのではないか、というところを常々課題に感じて、私達も林業を進めている。

あと、どうしても建材がメインに考えると今日お集まりの方々も材の出口である工務店さんだったりするが、先程勝山さんからも山を切ればアカマツや他にもいろいろな木が出てくるというお話があったが、それだけではなくカラマツだけを切っても建材に向かないものが大量に出てくる。でも、それを全部燃料にするというのはものすごく危険な発想で、やはり地域内での木材の流通の歩留まりといういわゆるカスケード利用と言わるが、そういうことを同時に考えていかないと無駄な使い方をしてしまうことになる。結果的に山元に還元されなということになってしまうので、その辺は外さずに考えていきたい。

【星川座長】

やはり主伐再造林というテーマもあるが、災害の防止ということもある。ただ伐っていくだけでなく、景観等を含めて考えていかなければいけない。カラマツにある程度絞っているが、アカマツも同じように地域に当然ある。今はすぐ使えないから燃料用あるいは合板用などに行き先が絞られすぎている。日本の市場的には、木材の商社系建材系の業界では、現在カスケード利用というか燃料にしない方法をはじめている。その辺も含めて、やはり大切に使っていくことが大事。

小口委員お願いします。

【小口委員】

課題として、私の意見は先程申し上げたが、皆さんおっしゃるようにコストが問題。道が狭いとか全部コストに関わってくる話。会社としてやっている以上はやはり利益を追求していかなければならない部分で、コストはすごく大事になっているが、それと一緒に「木を伐って、使っていく」という流れの中でもう一回山の形に戻していくこと、使いっぱなしではなく再造林するという考え方は非常に大事。ましてや、使った分は自然に戻るものもあれば戻らないものもあるので山の姿も変わることはある。継続してそういうことを考えていくのであれば、計画的な再造林が必要。そうなったときに再造林のコストはかかる。林業従事者数もそんなにたくさんはいなくて、同じ量を生産し続けて再造林も同じだけ増えていくと人手が足りない。事業体もやりきれなくなってしまう状態がいつか必ず来ると思っている。もう

一回山を作り直していくときのコストも、しっかり考えていかなければならない。
【星川座長】
　再造林、人手不足、特に地拵えという単純な作業を続けられる方が非常に少なくなっている。使うことに反する植えていく作業は、次世代のために非常に大事なことである。林業者の人口も減少するなかで作業員の確保をどうするのか、県内だけでなく県外を含めて募集するなどの検討が必要。はっきりとした情報ではないが、最近地拵えだけを専属で行う業界も現れているようだ。このような方々が増えていくと、各林業事業体の方ではなく委託事業等で不足する人員を補えることもあるのではないか。
　次に伊藤委員お願いします。
【伊藤委員】
　今までの話だと、伐る側と使う側ということで川上と川下のお話が主だと思うが、私どもはその中間で山から搬出されたものを製材屋さん等の使う側に販売するという流れを作っている市場である。今回は、地域材を地元で使うということなので、流通側としては、山から出していただいたものを製材屋さんが使いたい寸面や径級、長さに応じて選木機で分けて、それを需要先に流していくというのが大きな仕事になってくる。
　現在の木材流通関係の事情の話になるが、山から生産された材は安定的に市場へ出ている。民有林もそうだが、国有林でも現在システム材が出はじめている。全体の需要のことだが、当センターの約７割は県外に販売していて主に合板メーカー。これから地域材をどのように活用していくかということで進んでいくと思うが、やはり出てきた材を地元の方にどうやって使っていただくか、地元の製材屋さんにどれだけ卸して活用していただき、それをまたどのような仕組みで販売していくかというのが一番の課題。地元でどれだけ使っていただくかということをリサーチしながら進めていくことが一番の課題。
【星川座長】
　やはり木材をリサーチしてどれだけ需要があるのか、どんな方々に供給していくのかなど、もう少ししっかりと把握する必要性がある。そうすることで、合板へ７割ぐらい出荷している比率を少し変えていく必要性があるのではないか。そうしないと、どこかが風邪を引いた瞬間に山側が肺炎になってしまうというようなことになる。量、幅をリサーチして広げる必要性がある。
　合板に７割ということだが、ウッドショックの前と最中と後のここ数年の合板需要の状況をお教えていただきたい。
【伊藤委員】
　ウッドショック前は、価格や量は安定的に取っていただいていた。ただ、外材の

状況により合板メーカーはかなり左右されるので、為替が円安か円高かで外材を使ったり国産材を使ったりというようなハンドリングをされている。ただ、合板メーカーも、国産材も使っていくという流れなので安定的にとっていただいている。特にカラマツに関しては、合板材のフェイスパックに使うということで、スギやアカマツよりは安定的に取っていただいている状況。ウッドショックのときは、材が本当に足りなくて、どこからも引き合いがあったが、結局アメリカで住宅を建てている、ヨーロッパで木材が使われているとなると、外材が安定的に入っていたものが入らなくなる。そういうことから国産材に頼らざるを得なくなるという現状。これも、今後国産材の需要生産量を増やしていくなどをしていかない限りは、また同じことが繰り返されるのではないかと思う。

【星川座長】

世界市場で問題になってくると思う。以前まで円高といっていたが最近は円安。それでも、海外市場から来るものの値段が下がっているのが現状だと思うが、この辺もいろいろと皆さんのご意見をいただく必要があると思う。

それでは浅井委員お願いします。

【浅井委員】

当組合としては、木のある暮らしをサポートしていくという目標があって活動している。その中で、地域材を活用することに対して様々なアクションを起こしてきた。しかし、その活動が一過性になってしまったり、種まき活動であったり、なかなか実のある結果が出てこなかった。そんな中、この会議が開かれるということで期待している。やはり、県産材や松本市産材を使うということに関しては多くの課題があると思う。これについていろいろ記載したのでご覧いただきたい。

また、組合員の声として供給システムのPR活動、情報発信、相談窓口の設置ということとともに、例えば県産材を使った住宅を建てると補助金が出るということは今まであったが、結局工務店の手間が増える。お客さんにはもちろん利益あるが、工務店には書類の作成など煩雑な事務や手間が増える。工務店にも何かしらの形で補助金等が出ないかということが組合員の中から上がっている。

これまでの話の中で、いわゆる川上の方の実態も初めて聞かせていただいた。そういった方々も、やはりボランティアでやっているわけではないので、利益が出るような流れのシステムを作ることも重要な課題の一つ。

また、公共施設に使うという中で、やはり大きな情報発信の一つになるかと思うが、私も個人的に安曇野市の保育園建築に携わったことがある。腰板を節ありで付けてほしいといわれてメーカーから仕入れたが、結局施工するときの検品で、節の角が出ていると園児たちが触って危険なので節の角は出さないでほしいと言われ、当初使用量の3倍の材料を仕入れたという経験がある。お金をいただいたので良か

ったが、安全性、信頼性及び製品の安定性は必ず担保されないと使う方と使う業者としても大変である。公共施設であるからこそ、このようなことが求められるので注意する必要がある。

【星川座長】

私もかつて、松筑木協の会員であった。いろいろなイベントに参加させてもらった。単発で終わるという、どうしても旗を掲げて1回前進したがそれで終わってしまうことが多くある。この会議では、いろいろなご意見をいただき、実践の方向に持っていけるように、公共工事単発で終わらないような、そこから民間建物に波及していくような流れになっていけばと思う。

また、最後にお話があったが、羽目板の使い方の中で活用側としては節ありとしてもらった方が良いし、現実的にそれが使えるのかというのをしっかりと確認したうえで設計していただければと思う。

次に宮澤委員お願いします。

【宮澤委員】

私どもは流通ということで、卸の小売業という視点から意見をまとめた。

一つ目は生産体制である。丸太の仕入れから生産製品の販売の体制づくりがないと販売につながらない。二つ目に品質と製品価格ということで、流通製品と同等品質を作るとなれば、県産材基準でなければ通ってこないと思う。それに対して、価格も県産材同等かそれ以下ということで決めていかなければ難しい。また、需要と供給という部分での需要があるかないか明確にする必要がある。

全体的に、やはり丸太の供給と生産体制ということで、必要なときに、いつ・どこで・誰が持っているのか。また、何の樹種で地域産材として使っていくのか、先程の話ではカラマツが多いとのことなのでカラマツとすれば構造材なのか内外装材なのか、一般住宅なのか公共施設なのかなど明確にしていった方が良い。

全体としては、やはり松本市の公共施設ということになれば松本市で設計段階から盛り込んでもらわないと難しい。また、その製品の認知度もプラスアルファで必要なってくる。公共施設へ活用する中で、体制が整っていなければ設計士や工務店も困ってしまうので体制づくりは重要。また、県産材と違い市産材なので、ストーリー性を含めながら盛り込んでいくのも必要。

【星川座長】

公共事業への活用について、どのように使うのか、どんな製品をどのぐらい用意するのか、ということが出てくる。今までの例だと、計画から3年ぐらい経って形になってくるのが多い。余談だが、先週東京都の林務課長と会っていろいろ話を聴いた。東京都で5千万円出して私鉄小田急線の参宮橋駅舎に多摩産材を活用した。素晴らしいものができていた。あと、補助金で、東京都のまちづくりとして木質化

すると補助が出る。多摩産材を3割使い、後の7割は国産材であればよいというすごく緩いもの。そういう形であまりガチガチにせず、使っていただくことを目的に補助をしている。参考にしていただければと思う。

次に岩垂委員お願いします。

【岩垂委員】

当社も、先程原さんが言われたとおり、カラマツ材が議題だが、県産材及び市産材は様々なものがあると思う。カラマツに特化せずいろんな樹種も有効活用し、販路に繋げていくかが大事。

あと、皆さんからお話があるとおり、外材関係について弊社では住宅の構造材や内装材などを取り扱っているが、製品化したときに価格競争で安いものにどうしても飛びついてしまうということがあって、価格で採用されないということも多々ある。ただし、木育のような形で木に触れてもらう機会を通じて、皆さんに認知していただくことが大事。

また、伐採業者や流通業者等に、実際丸太が何に使われているのか、どんな製品になっているのかなどのＰＲも必要かと思う。

あとは、原木丸太のカラマツが合板メーカー流れてしまっていること。当然民間の事業なので、価格の高いところへ流れてしまうということは実際ある。当然作り手側も丸太など高い商品を仕入れて、販売に載せたいのだがなかなかそういうところが難しい。

伐採時期は、秋口から冬にかけての寒伐りが丸太として一番良い。製品として丸太の納材がずれてしまうと、アカマツ材の有効活用としては青が入ってしまい価格が落ちることもあるので、伐採時期等も検討する必要がある。

議題はカラマツだが、松枯れ処理を早急に行う必要があると思う。地域の住民からも伐採要望がある。最近の線状降水帯出現や豪雨がある場合、災害級の危険があるがなかなか整備が進まないのが現状。良い事例として、安曇野市押野地区がある。松枯れになったところを全伐し、植林等を経て現在は木々が生え育っている。

皆さん言われているとおり、庁舎や出張所等での地域材活用の促進がされていない。木質化を含めて率先して木を使いましょうという形で進めていただきたい。

当社、カラマツ材に関しては、基本的にウッドショック前は内装材の床や外壁等としてやっていたが、価格面がボトルネックになってしい現在は販売自体もやっていない。再度、集成材やラミナ等にすることによって、県外にも製品として売れるのではないかという形ではやっている。公共施設を建築する際は、コンクリート造で木質化が少ないということがあるので、そこの部分で使っていただく形が良いと思う。先程宮澤さんも言われていたが、設計段階で取り込んでもらうこと。カラマツで外壁や構造材などで使っていただき、目に見て触れてもらうことが大事。

また、補助金を通じて一般住宅にも使っていただくような政策が大事。

【星川座長】

アカマツを中心にやられているようだが、カラマツについては今後どうか。

【岩垂委員】

川上から川下、つくり手側までは良いが、やはり一般の方々の認知度が少ない。当社としてもそこをどのように、建築屋さんやビルダーさんにＰＲしながら、競合先の外材関係に勝てるような形で仕組みづくりをしたいと思っている。

【星川座長】

松本市の市木はアカマツなので、カラマツというテーマで進んでいるが、アカマツも同時進行で台上に登れば良いかなと思う。また、建築についても先程申し上げたように、あまり大きな縛りなく地域材をたくさん使うという方向で検討していただければ、山側も使う側もアイデアが出てくるのではないかと思う。

次に滝澤委員お願いします。

【滝澤委員】

認知度が少ないという裏側には、会社等も長野県産材活用に伴う補助金については省エネに抱き合わせた形が多いが、お客さん側からすると何となく目当てがお金というところが大部分で、県産材を使いたいから補助金を利用するという方が少ない気がする。浅井さんもおっしゃっていたが、補助金申請の書類作成が煩雑であるなどいろいろ大変なところがある。それと同時に、県産材を活用するという認識がユーザーにほとんどない。着工件数も減っているし、国内の木材価格が下げ止まりになっているため、市場で回っている材料、材木がより回りにくくなるので、特別感を出すしかないと思う。建築ということではなく、いろんな活用の可能性を生み出しながら、木に触れてもらう機会をいかに作るか。認知してもらうためのお祭り、フェスなど。例えば空港近くに木製遊具がある所で松本市主体で「こういう使い方ありますよ」みたいなものを何回かやるなど、そういうこともやればどうか。

ウッドショックで材木が手に入らず上伊那森林組合へ行ったとき、職員の方から「本当にこのままだと林業をやる人がいなくなってしまう」という話を聞いた。まずは、林業側のサポートがかなり必要だと思った。

松枯れの件について、私もずっと思っていて、開成中学校の下も結構枯れていて、大丈夫かな、土砂崩れにならないのかなと、はたから見ても思う。虫食いになる前に、健全な木を先に伐採し活用して植え替えるということが、松枯れを止める方法なのではないか。予防というか、それでも山を守れるのではないかと思う。それをこういう機会に、松枯れから守るという名目でも良いが、それで使いませんかというようにやっても良いと思う。

とにかく今回の内容は、循環してどうやって回していくかということだと思うの

で、そこを頭におきながら、幅広く多様性のある使い方とどうやって循環していくかというところに絞って、長い目でやった方がいいのかなと思った。
【星川座長】
　やはり市民の方、民間の方々に知っていただくためには、書面だけで伝えるのではなく、実際に目の前で何かを行ったりする事業はこれから先実施する必要性がある。ほとんどの方は海外の材でも地域産材でも木なら何でもよいという方がほとんど。その中でどのように地域産材を使っていただけるのか考える必要がある。
　次に中川委員お願いします。
【中川委員】
　私ども工務店協会は、市内の22社の工務店で構成されている。元々は長野県建設労働連合会の工務店部門という形で行っていて、全国に組織がある。
　全国建設労連が、4～5月に「住宅の建材・設備の価格高騰・納期遅延の影響に関するアンケート」を行った。結果としては、92.3%の方が原価が上がったという回答をいただいている。そうした中で、施主の予算というのが決まっている中で、利益を圧迫しての施工が続いており、より安い木材を求める声が上がっているのが実情。また、過去に松ヤニで大変な目にあったということで避けている方もいた。
　松本市で実施しているカラマツの助成金について、予算が限られる中で大変良い制度だとおっしゃる方もいた。周知がうまくいけば、活用も広がるのではないか。
　新建ハウジングが実施した、新築・中古リノベーションを行った方600人へのアンケートにおいて、住宅要素の重視度では「国産及び地元材を使っている」という項目で、「かなり重視した」、「どちらかといえば重視した」の回答率が20項目中最下位だった。動線や住宅機器などは重視する中で、地元の木だからとはいえ積極的に選ぶというのがなかなか難しい状況だと思う。住宅に関して最大の課題は、施主の地域産材への認知度・認識が低い。その中で、まずは公共施設に活用し、地域産材の良さを知ってもらうことは、良い取り組みだと思う。
　松本市の施設にどう使っていくかについて、長野県建設労連の傘下組合が行う各自治体への交渉で、近年木造ファーストを要望していることに対し「ＪＩＳ・ＪＡＳ規格の木材を標準仕様で明示しており、県産材の活用については工事業者が選択する最良部分としている」、「県産材の活用は重要だが、コスト面、品質等により活用は難しい」、「公共建築物の木質化は理想だが、自然地形や災害等を考えると鉄骨造を選択肢に入れる必要がある」などの回答を県内市町村からいただいた。一方、数年前だが大鹿村では「村のカラマツを何とかしたい。村の施設、公共トイレ及び道の駅でカラマツを使っている」など、力を入れているケースがある。また、塩尻市では、今後新たな建築が減っていくので、県産材を活用した木造住宅の普及促進するため、新築住宅に対し150万円の助成制度を設けるとのことだった。課題とす

れば、行政側が何としても地元材を使うという意識だと思う。今回、松本市がこうした検討会議を開催し取り組んでいただくことについて感謝申し上げる。

公共建築物の木造率は公表されているが、長野県は全国平均を若干上回るものの決して高い数字ではない。市産材カラマツを集成材として使うのか、化粧材として使うのか、また認証製品の生産能力が整っているかという方向性が課題である。また、先程の小口さんの話でもあったが、カラマツを市内施設に活用することを前提に、木材の安定供給に向けて伐採計画を立案できるかどうかというところだと思う。ここのカラマツを使うんだという形で割り振ってでも使っていく、建築業者にとっては当然商売なのでコスト面があると思うが、業者の裁量に任せずに松本市として立案できるのか、これができれば成功するのではないかと思う。

【星川座長】

やはり活用だけではなくその前の段階で、ＪＩＳ又はＪＡＳの規格の木材について、市ということではなく長野県としても非常に大きなテーマである。ＪＩＳ工場ＪＡＳ工場はほとんどない。ちなみにＪＡＳの新しいツーバイフォーディメンション材といって県の補助でやっているが、現実的に量産ができない。試験的にＪＡＳ材として公表している。民間では、主なる業務が優先になってしまうので、ＪＡＳ製品が作れないわけではないが補足的でしかやっていない。たくさん使うというのがこの目的だが、民間レベルですべてはできない。

先程、山側の方でも「人が足りない、樹種転換だれがやるのか」というようなこともある。工場側の方の製材工場等も「量が増えればできない」というようなこともある。この辺もいろいろテーマの中に必要性が出てくると思う。

カラマツを使った中型・大型建築物について、松本市では出ていないが、全国的には大きく出ている。オリンピック施設の国立競技場について、最初は木造の柱を使うという案が出ていた。結果的には、木造の柱ではなくなり木質の競技場となった。2018 年頃から国際認証を含め木質化していこうということで増えてきたと思う。これから先はさらにこれが増えてくると思うので、県や松本市としてどれだけ供給していけるのか、計画の中に参加できるのか、スタートラインに乗れないと前に進めないので、この辺も含めていろいろ将来に向けて検討いただければと思う。

次に北澤委員お願いします。

【北澤委員】

皆さんからは、本当にそのとおりだと思われるご意見をたくさんお伺いした。どれもこれも重要な内容で参考にさせていただいている。

松本市では、令和 3 年度から奈川での市有林の主伐をはじめられ、その材は市場に流れ、県外の合板工場へ流れている。

カラマツだから何でも伐る、主伐再造林だから伐るということではなく、収穫期

を迎えたカラマツ造林地で、地形などの条件から箇所を抽出して行っている。
　また、林業総合センターにおいて、その主伐材の強度試験を実施し、奈川産のカラマツは強度があることが数字で実証された。
　この事業を実施されていくにあたり、森林環境課職員の方々も初めてのことだったので、伐った材がどのように流通するのかを見るため、木材市場や県外の合板工場を一緒に見学し関係者からお話を伺った。
　そのようなことを重ねていくうちに、課題が見えてきたが、市だけでは解決できないため、業界の方々、山側の林業事業体の方々、ユーザーに近い方々に一度お集まりいただき、忌憚のない意見をいただかないと課題解決には手詰まりを感じていた。本日、各業界のトップの方が一堂にお集まりいただき、この会議が実現したことに感謝申し上げる。
　この会議では、本日出された課題等を整理し、それぞれの分野で役割を担っていただける方の明確化、或いは実際に公共施設へ使うのであれば、先程から出ている価格の設定など、どこまで積み上げられるかだと思う。また、奈川産のカラマツに強度があるという強みを出していくことも考えられる。
　地域振興局という立場で出席しているので、個別に相談やお伺いすることもあるかと思うがよろしくお願い申し上げる。
【星川座長】
　強度の話が出たが、信州のカラマツは強度が高いことが数値で示されているが、残念ながら日本全体の中で信州カラマツが強いことを知っている方は非常に少ない。私もいろいろ全国を歩くが、北海道産の方が安いということでそこに落ち着いてしまうが、何が違うのかと問われれば強度と答える。その辺をしっかりと示せることが、これから先の販路開拓として必要。皆さんの中では、カラマツは東信産が強度が高いと錯覚されていると思うが、実は違う。県内の地域ごとにそれぞれ特徴がある。松本市産、安曇野市産など非常に強度は高く、何千枚何万枚と試験をしても非常に良いデータが出てくる。ただ、それを知らないので、この辺のＰＲが必要である。松本市の公共事業等に活用しそれを宣伝すれば、強度の高いものがあることを全国に発信できると思う。それが最終的に山元にしっかりとお金が返せてお互いに利益があるというところに持っていければ良いと思う。
　最後に松本市としてお願いします。
【事務局】
　行政としての一般的な課題を記載させていただいた。
　カラマツ材の活用については、質、量、価格の不安定さなどの課題があると認識している。「価格が高い、流通が少ない」というところから欲しいときに必要な量の手配が難しい。また、乾燥や強度が一定した品質の材が調達できない。しっかり

乾燥させないと、ひび割れや反りが発生してしまう。

材の活用に直接的な課題ではないが、林業事業体の労働力減少ということがある。伐って、使って、また育てるという作業をする中で、やはり労働力の減少や人材不足は課題であると認識している。

現在地域産材は、一般的に需要が多く高額で売買される合板の原料として県外の工場へ出荷されているため、それを地産地消するためには運搬等コストがかかる。

市民が、日常生活の中で木材に触れる機会が少ないということ、また触れたとしてもその先の「買いたい、使いたい」など具体的に繋がらない。松本市としては、カラマツ材での手指消毒台（本日のこの会議室入ったところに設置）等を作製し、多くの市民が訪れる市内公共施設へ設置してカラマツを身近に触れていただくということも行っているが、なかなか「使いたい」に繋がっていくことが難しい状況。

公共施設へ活用するための課題だが、公共施設及び保育園等に活用するにあたっては、建築基準法に基づいた耐火構造とする加工工場が近隣にないため、県外に運搬して加工し、また戻ってきて使うということがあるので運搬コストがかかる。また、建築後の維持管理費の増加が予想される。

それから庁内での地域産材活用の意識が低い。市の公共建築物工事等に可能な限り地域産材を活用するように努めるという方針があるが、なかなかそのような意識にならないというところが課題。庁内で地域産材の活用に向けた連絡会議を年 1 回行っているので、積極的に使っていただくようにこちらの方から促していきたい。

市有林カラマツの伐採を進めて積極的に公共施設へ活用することで、需要と供給のモデルを作り、そこから民間施設及び一般住宅への活用促進に波及するものと考えているので、まずは公共施設の活用に向けて皆さんとともに考えていきたい。

【星川座長】

庁内でもの木材活用については検討いただく必要がある。違う部署に行くと、木材のことについて聞いてくれない。コスト的なことや建設会社にお任せという形だが、その中でやはり内部への働きかけが必要。30 年程前に梓川で大量にカラマツを河川工事材に活用していただいた経過がある。やはり、まず土木に使っていただくというのは大事であり、県や市でも積極的に使っていただくことが必要。あと、大手ゼネコンでは土壌改良や地盤改良の材として木製杭の使用を始めている。そういったものも含め、建築だけではなく土木材等様々な利用価値があるので、この会議でまたお知らせできればと思う。

⑷　今後の日程について

【星川座長】

今後の日程について、第 2 回検討会議を 9 月頃に計画させていただきたいと思う。皆さんお仕事されていて忙しい中で集まっていただかなければいけないが、開

催について昼間・夜間等ご意見あればお伺いする。できるだけ皆さんが集まりやすい時間帯を選択したいと思う。

＜特になし＞

日程については、事務局で案を出していただき、取りまとめていただきたい。

予定された議題は以上。事務局へお返しする。

7　その他

事務局より連絡事項あり

8　閉会（森林環境課長）